
虹のカナタ

ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹のカナタ

【Nコード】

N2697P

【作者名】

ユウキ

【あらすじ】

団地に住む人々の話。

団地の中には

人々の集まるバーがあった。

その名前は

「虹のカナタ」

そんな虹のカナタに

今日も客はやってくる。

団地の人々の家庭事情

恋愛、友情、絆

そんなものが見えてきます。

笑顔あふれる虹のカナタへようこそ！

1-1 (前書き)

初めて書くのであまりうまくありませんが
どうか最後までお付き合いください。

1—1

ここはとある団地

子供から年寄りまでが住んでいる
そんな団地の中に

このバーはある「虹のカナタ」

1日中あいているこのバー

といっても来るのは

団地の住人ばかり

店の主人はいろいろな事情があり

まだ24歳である彼女

新木真由—アラキマユ—である

カランカラン

「いらっしやい」

今日もこの虹のカナタへと

客はやってくるのである

「おう、公平じゃない」

やってきた客は

伊野公平—イノコウヘイ—

彼は真由とおなじ24歳

もちろん団地の住人である。

「何する？」

「ビールで」

「はいよ」

いつも彼は昼間にやってくる

なぜ昼間？仕事は？なんて疑問は

もはや真由にはない

もう慣れてしまったからである。

しかし今日は一段とため息の回数が多い

「どうした？今日はやけにため息ばかりじゃない。
なんかあったの？」

「いや・・・まあ、その・・・」

「なんなのよ、あるなら早くいいな」

真由はわりとずけずけ言うほうである

口調もどちらかといえば男みtainなことが多い

「実はさ、俺ホストなわけ。」

「へえ、そうだったんだ。」

いっつも昼間来るからなにしてんだろって

前は思ってたけど。まさかホストだったなんて」

「そうなんだよ。でもさ、そろそろ潮時かなって」

ホストをしている公平

しかし、最近好きな子ができたらしい。

その子は清楚でとてもきれいで

一目ぼれして話しかけて何度か

出かけたこともあるらしい。

けれども、ホストだということは

その子には言っていない。

さらにその子はホストは嫌いだ！

なんて言っていたものだから

彼はやめようと思いだしたのだ。

「やめた後どうすんのさ？」

やめて告って成功したって収入なかったら

どうしようもないでしょ」

「それはそうなんだけどさ、問題はそこじゃないんだよ。」

なんでも彼は

今働いてる店に50万の借金があるらしい。

だから辞めようにも辞められないというわけである。

「そうなんだ」

カランカラン

「いらっしやい」

「真由、いつもの♪」

あれ、公平じゃん、どうしたの」

そんな深刻な顔してさ」

入ってきたこの陽気な彼女は

2人と同じ年の浦野理沙－ウラノリサーである。

流れ的に全て理沙に話した公平。

「へえ、じゃあさあ、50万あったらいいわけ？」

「えっ!？」

「50万あったら、ホスト辞めて告って

そのあともちゃんと生活のために

働くのかってきいてるの」

「そりゃ、やってみせるさ」

「ふうん」

それっきり理沙は口出ししなくなり
注文したものを飲み干すと
すぐに帰って言ってしまった。
台風のように過ぎ去った理沙。
いったい何がしたかったのだろう。
そんな疑問を持ちながら公平は
今日も仕事へ向かっていった。

1週間後

カランカラン

「いらっしゃい」

公平は1週間ぶりに
虹のカナタへとやってきた。

「どう？」

「何が？」

「なんか50万のあてみつかったの？」

「ああ、今俺昼間バイトしてんだ。」

公平はあれから

昼間バイトを見つけ50万を稼ぐために
働いていたのだ。

だからしばらく店にはこなかったのだ。

「まだ全然だよ」

「まあ、頑張りな」

カランカラン

「いらっしゃい」

「あゝ、公平みつけ♪」

「なんだよ」

「はい、これ」

「なんだよこれ」

なんと渡されたのは現金50万円

「なんでだよ、なんでお前が50万なんて」

「えゝ知らなかったの私実はお金持ちなんだよゝ」

こんな団地に住んでいる彼女ではあるが
実は実家は大豪邸。

でも、なぜ彼女が公平の50万を渡すのかは
謎なままである。

「こんなの受け取れないって」

「いいのいいの、そのうちかえしてくれればいいからさ」

そーいい残すと

彼女はすぐに店を出て行ったのである。

戸惑う公平に真由は

せっかくもってきてくれたんだからさ

ちゃんと受け取ってあげなよ。

あんたがちゃんと働いて返せばいいんだからさ。

といったのである。

それを聞いて公平は難しい顔で帰っていった。

公平は心の中で感謝した。

ありがとう理沙絶対に戻すから

そのままホストクラブに向かい、
借金を返して店をやめたのであった。

「そう、みせ辞めたんだ」

「ほんとありがとな理沙、絶対に金返すから」

「いいよそんなにあわてなくても」

「本当にありがとう、

俺今日彼女に告白しにいくんだ。」

「へえ、そうなんだ。」

あ、もうこんな時間、私行かなきゃ、

約束があるんだ！じゃあね」

「おう、本当にありがとう！」

「ふふ、もういいよ♪」

公平は約束の時間まで

団地をふらふら歩いていた。

「お金返してくれませんかね」

公平は借金返済を迫る

こちら辺では有名な金貸し

MONEY LIFEのオーナー

隅五郎一スミゴロウであった。

彼のところは返済期限を

必ず守らなければ・・・

そしてそれを迫られているのは

公平の友達

後藤風太ーゴトウフウターだった。

「風太!どうしたんだよ」

「公平・・・」

「お知り合いですか?」

「ああ、風太どうしたんだ借金なんて」

「・・・」

「後藤さん、なんかだまされて

50万とられちゃったみたいですよ。

そんなときにお金が必要になって

うちに借りに来たんですよ。」

「風太・・・」

1ヶ月前

風太はとある商品に大金をつぎ込んだものの
すべて欠陥商品で

商売にはならないわ、それを売ってきたやつは
連絡がつかないわでもうどうしようもなかった。

そんなときに、母親が入院して

どうしても金が必要になり

30万の借金をしたのだという。

その返済期限が昨日で風太は
用意できなかったのだという。

「とりあえず来てもらいましょうか」

「・・・」

「どこつれてくんだよ」

「あなたは関係ないでしょう。」

さあ、行きますよ。」

「風太!」

車に乗せられ風太は連れて行かれた。
公平はあわててとりあえずバーに向かった。

カランカラン

「いらっしゃ・・・」

「大変だよ!!」

慌てて入ってきた公平に

驚いた真由

事情を真由に話す公平

「どうしよう」

「わかんないよ、30万だろ・・・」

「俺また店にいつてくる」

「店ってホストクラブか？」

ダメだよそんなの、せっかくやめられたのに

それに理沙に借りてやっとな返せたんだろ？」

「それはそうだけど・・・」

「だけど俺・・・どうすれば・・・」

「そろそろあの女の人と待ち合わせの時間じゃないの？」

「そうだけど、それどころじゃないじゃん」

「大丈夫だよ、そっちはなんとかするから。」

それに隅のやつだって殺したりするわけじゃないしさ。」

そういわれ公平は風太のことを気にしながらも

待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせは団地からそれほど遠くないところで

歩いててもそんなにはかからなかった。

「公平君」

「あ、佐里一サリ一さん」

「どうしたのなんか顔色悪いけど・・・」

「え、別になにもないよ」

「そう、それならいいんだけど」

すぐに異変に気がつかれてしまった。

彼女はほんとうに美しい

そんなことを公平は再び思った。

「あの、佐里さん」

「はい」

「実は伝えたいことがあって・・・」

「なんでしょう」

ウゝーウゝー

公平の携帯が鳴った。

「すみません」

「どうぞ」

電話の相手は真由だった。

「公平！？ 大変！！ 風太が」

「えっ！？」

「とにかく早く来て！」

そういつて電話は切れた。

なにが起きているのか・・・

公平には嫌な想像しかできなかった。

「すみません、あの、その・・・」

「なにか急用ですか？」

「あ、はいそうなんです」

「そうですか、ではまたの機会ということでは？」

「すみません」

公平は店を飛び出して

急いでMONEY LIFEへと走っていった。
MONEY LIFEの近くには真由がいた。

「公平こっち！」

「風太は？」

「あの中よ、なんかものすごい
引っ張られてったからやばそうで
電話したの、とりあえずこれ15万」

「どうしたの」

「あたしの金なんだからどうしようと勝手にしょ。」

そうやって15万を公平にわたすと
すぐに真由はバーへと帰って行った。

「なんだよ、もう戻るのかよ」

公平は勇気を振りしぼって。

MONEY LIFEへと入っていった。

「どうしようか、後藤さん」

「ちゃんと返すからさ。」

「も少しだけ待ってください。」

「そうは言われましてもね」

「ちよっと待った！」

公平が入っていくと

中には隅と風太だけがいた。

隅はいすに我がもの顔で座り

風太は地面に正座していた。

「どうかしましたか」

「これ、とりあえず半分だけど15万

とりあえずこれで」

「公平、どうして・・・」

「確かに15万ありますね。

しかたありませんね、残りはしばらく待ちましょう。」

「ありがとうございます」

公平は風太を連れ出した。

真由が金を用意してくれたことなどを

風太に伝えた。

2人はバーへと向かった。

「2人ともありがとう！」

「いいよ」

「あたしの15万はいつでもいいからさ」

こうして風太はなんとか助かったのである。

残りの半分も期限までに

何とか返して借金の清算は

無事終わったのであった。

真由の話によると

あの後バーに戻ると理沙がいたらしい。

約束があると言っていたけれど

相手のほうにいろいろとあつて

早くに帰ってきたらしい。

もちろん理沙も風太と知り合いで

話を聞いて心配していて、

公平と風太がもどってくる少し前に

帰っていったらしい。

1-1 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。
続きは出来次第掲載しますので
よろしくお願いします。

1-2 (前書き)

佐里への告白が出来ずにいる公平。

ある日ようやくそのチャンスのめぐり合うが・・・

公平は彼女への告白をできずにいた。

あの日以来2人の都合が合わないらしい。

といってもほとんどは佐里のほうが

なにかと用事が入っているのだ。

公平は彼女の家がどこかは知らない。

というか、ほとんど何も知らない。

名前、年齢ぐらいのものである。

それでも一目惚れなのだからしかたない。

公平は早く告白したくてたまらない。

かといって、相対すると緊張して

あまり話せなくなるのである。

今日は火曜日で公平はバイトを終えて

とくにすることもなかったので

団地近くの川沿いを歩いていた。

するとそこには風太がいた。

「おう、風太」

「あ、公平」

風太は少年とキャッチボールしていた。

公平には誰なのかわからなかった。

「この子誰？」

「ああ、こいつは隣の岸田さん家の

猛一タケルだよ。」

よく相手してやってんだ。

こいつんち母子家庭だからさ」

「へえ」

岸田猛（9）は

風太の隣の家に住んでいて

母親との2人暮らし。

母親は岸田洋子—ヨウコ—旦那さんとは

4年前に別れたらしい。

それ以来女手ひとつで猛を育ててきた。

そんな猛のキャッチボールの相手を

風太はかってでているのだ。

「たける、今日はもう帰ってらっしゃい」

「ほら、猛呼んでるぞ」

「うん、また遊んでね」

「おう、もちろんだ」

「ばいばい」

「ばいばい」

猛は満面の笑みで走っていった。

猛は父親の顔をうつすら覚えているらしい。

仕事人間の夫に洋子が

耐え切れなくなって別れたのだそうだ。

今父親はどこにいるのかはわからない。

公平と風太は虹のカナタに向かった。

カランカラン

「いらっしゃい。おう、風太に公平じゃない」

「俺ビール」

「じゃあ、俺も」

2人以外に客はいなかった。
普段でもそこまで客がいるほうではないが
まだ夕方ということもあるからだろう。

「この前はほんとにありがとな、真由」

「いいよ、もう15万も返してもらったし。

別にあんなに急がなくてよかったのに」

「どうしてそんなに金早くあつまってんだよ」

「いやあ、実は・・・」

なんと風太は以前公平が勤めていた
ホストクラブに入っただけらしい。
しかも予想外に人気で
ものすごくもうかってるらしい。

「あ、そうなんだ・・・」

「残念だったね公平、風太の方が人気みたいだね」

「くそ、俺のときなんかほとんど・・・」

だから借金までして・・・」

「どんまい」

「それはおいといてさ、告白したの？」

「まだなんだよ」

「告白！？なんのこと」

風太は事情をしらなかったため、
驚いて口に含んだビールを嘔き出してしまった。
事情を風太に説明した。

「俺、悪いことしたな・・・」

「別に風太は悪くないって」

「それよりどうすんのさ」

「なかなか都合合わないんだよな・・・」

「わざと拒否られてんじゃないの」

「そーかな・・・」

真由の冗談にかなり落ち込んだ公平。

さすがの真由も冗談だよと言って慰めた。

そのとき公平の携帯にメールが入った。

「佐里さんからだ！今週の金曜日いかがですか？だって！」

「よかったじゃない」

「よっしゃ〜今度こそ！」

さっきまでのテンションからは一転

今度はおおはしゃぎで

真由はあきれた顔でため息をついた。

それを見て風太はまあ、いいじゃんと言った。

「でさ、その佐里さんてどんな人なの？」

「うーんとね」

髪はロングでとにかくきれいらしい。

いかにも金持ち育ちという感じなのにも関わらず

団地のことをいいなあと思っているらしい。

団地をよく通りかかるらしく

団地のことを良く知っているらしい。

「なんか理沙とは真逆な感じかな」

「へえ、でもなんかわかるわ」

カランカラン

「呼んだ？」

ものすごいタイミングで理沙が入ってきた。

予期していない来訪に

話を聞いていた風太はまた嘖き出した。

きゃーきったなーいいつものテンションで理沙が言う。

「ほんと、真逆だ」

「ん？なんか言った？」

「いや、別に。じゃあ、俺帰るわ」

「おう」

「えーもう帰っちゃうの」

公平は帰っていった。

なんの話してたの？と理沙が聞いてきたので

風太は答えていた。

もちろん理沙とは真逆という表現は使っていない。

そんなこといったらその場にいる自分が

危ないと思ったからである。

そのあとは別の話題を続け

しばらくして風太も理沙も帰っていった。

翌、水曜日

この日公平はバイトもなく

暇だったので昼から散歩をしていた。

といっても、団地のなかである。

団地の中にはA棟からE棟まであって

各棟は5階建てで各階には10の部屋がある。
虹のカナタはC棟とD棟の間の道を
まっすぐ川のあるほうに向かうとある。
公平はA棟に住んでいる。
風太はC棟、理沙はD棟に住んでいる。
A棟とB棟の間にはやや大きめの公園がある。
公平はその公園の近くを歩いていた。
するとそこには昨日の少年猛が1人でいた。

「おい、少年どうしたんだ？」

「・・・？」

「あ、俺風太の友達」

「お兄ちゃんの友達？」

「そうそう」

猛の顔に笑みが浮かんだ。

「どうしたんだ、こんなところで1人で」

「うーんとね、お母さんがね

ちよつとの間外にいとくなさいって。」

「なんで？」

「わかんない」

「そっか・・・。遊ぶ？」

「うん」

猛はさらに笑顔になった。
2人はキャッチボールを
しばらくの間していた。
猛が疲れたようなので
休憩することにした。

しばらくすると、猛の母親が呼びに来て
猛は帰っていった。

それと入れ違いになる形で風太がやってきた。

「おう、公平」

「おう、風太。今俺猛と遊んでたんだ。」

「あ、そうなんだ。どうりでいなかったわけだ。

いやさ・・・」

風太は暇だったので猛と遊ぼうと思って

インターホン押したら

猛の母洋子が出てきて今はいないといわれたらしい。

風太はそのまま戻ろうとしたけれど

奥に見知らぬ男性が見えたというのだ。

「いったい誰だったんだろう？ さっき帰っていったけど。」

「さあ、そんなのわかんねえ」

「まあ、そりゃそうか」

しばらくの間2人は公園のベンチで語り合った。

そのあと風太は仕事に向かった。

公平はまた暇になってしまった。

しかたなく家に帰ろうと思ったけれど

ただ戻るのも、と思い遠回りして帰ることにした。

ちょうどD棟のところを通りかかったとき

長髪の見覚えのある女性がD棟の建物に入っていた。

「佐里さん・・・？」

そんなはずはないと思い追いかけることもなく

また歩き出した。

しかし、やはり気になってしまう。

仮に佐里だったとしてなぜ団地にいるのか。

よく通るとは言っていたけれども

建物に入っていくのはどう考えてもおかしい。

もしかして、知り合いがいるのか。

いや、やっぱり見間違いだ。

あれこれ考えていると自分の部屋に着いた。

翌日、昨日見た人のことはすっかり忘れ

公平はバイトへと出かけた。

そのころ虹のカナタでは、

カランカラン

「いらっしやい、

おや、初めて見る顔だね。」

「ああ、自分ここの住人ではないもんでね」

「そうなんだ。で、何する？」

「じゃあ、ビールで」

「はいよ」

店にやってきたのは若い男だった。

いかにも仕事をバリバリやってそうな雰囲気。

特になにもしゃべることもなく

ただゆっくりとビールを飲む男性。

「どうして団地に？」

「あ、いやちょっと知り合いがいてね」

「そうなんだ」

少しだけ会話をして

また、無言でビールを飲み続けた男性。
そして、ビールを飲み終えたと

「実は自分バツ1でね」

「へえ」

いきなり話をしはじめた男性

4年前に別れて子供もいたらしい。

その子供は自分のことをどう思ってるだろう
そもそも自分のことを覚えているのだろうか。
そんなことを語りだしたのだ。

真由はただ聞いていた。

「・・・といわけなんすよ」

「ここに来たのはそれと関係あるのかい？」

「ああ、まあ・・・そんなんだけど」

「そうかい」

それからしばらく男性はだまっただまっていた。
その後男性は帰って行った。

ちょうど男性が出て行くときに

風太がやってきた。

風太は入れ違いになった男性に見覚えがあった。

「今の誰？」

「ああ、なんか別れた奥さんに会いに来たとか言ってたよ」

「別れた奥さん！？ってことはあれが・・・」

「どうかした？」

「いや、別に」

そこからは別の話題になり

さっきの男性の話はしなかった。

風太には男性の正体がわかった。

そこにバイト帰りの公平が合流した。

さらに理沙もやってきて

あれこれ話しているうちに時間は流れた。

翌、金曜

この日は公平が佐里と会う約束をした日である。

約束は夕方で、それまではバイトである。

風太は昨日あれから仕事に向かって

かなり遅くまで働いていたように昼まで寝ていた。

起きてしばらくするとインターホンが鳴った。

ドアを開けてみると猛がいた。

その後ろにはあの男性が立っていた。

「お兄ちゃん、僕のお父さんだよ。」

「初めまして、猛の父です。」

いつもお世話になっていましたみたいで。」

「いえいえ」

「今日ねお父さんと出かけるの」

「へえ、よかったな」

それだけ言うと猛は走っていった。

猛の父は軽く会釈をして猛の後を追った。

夕方

約束の時間よりも早く待ち合わせ場所についた

公平は緊張が高まっていた。
今日こそ告白するんだという気持ちでいっぱいだった。

「公平さん」

「佐里さん！」

佐里がやってきた。

公平は緊張のあまり少しおどろいた。

このとき、あの疑念が公平の中で再び起こった。

「あの、佐里さん。実は佐里さんそっくりな女性が
団地の建物に入って行くのを見たんですが。」
「えっ」

佐里はすこし驚いた声を出した後

「人違いですよ」

「そうですか、そうですよね」

「そうですよ、それより・・・」

佐里がお腹がすいたということなので
少し早いが食事に向かうことにした。
公平は告白のチャンスがうかがうも
なかなかそのチャンスに恵まれなかった。
食事も終わり落ち着いたところで
話を切り出そうとしたが、佐里の
少し外を歩きませんかという誘いに
阻まれてしまった。

2人は店を出て団地の近くを歩いていた。
今度こそと意を決した。

「あの、佐里さん」

「はい、なんでしょう」

「あの・・・」

「あ！」

佐里が大きな声でいうので驚き

後ろを振り返ってみると

車道の真ん中に見覚えのある少年がいた。

猛だ。向こうのほうから車がやってくるのが見えた。

「危ない！」

1-2 (後書き)

次回も出来次第更新します。

感想なども待っています。

1-3 (前書き)

猛の運命は!?

「危ない!!」

車のクラクションが大きく響く。

猛の名を呼ぶ男性の大きな声が聞こえた

佐里はゆっくりと目を開けた。

目の前にいたはずの人物がいない。

あたりを見回すと道路にいた少年は

歩道にたおれている。

引かれて飛ばされたのかと思ったが

少年は起き上がった。

人の叫ぶ声が聞こえた。

誰かが倒れている。

佐里はその方向へと歩き出した。

冷たい風が佐里の顔にふきつける。

佐里はしだいにふるえ出した。

遠くから救急車の音が聞こえる。

誰かが呼んだのであろう。

もう少しで倒れている人物が見えるところまで来た。

その人物を見た佐里。

声にならない声で叫んだ。

そう、倒れていたのは公平であった。

「公平!!!!」

あの清楚だった佐里の姿はない

まるで別人であるかのように取り乱している。

「公平！ねえ、公平！目をさまして！」

騒ぎを聞きつけた風太と猛の母・洋子がやってきた。
風太が佐里のところにやってきた。

「公平！」

洋子は猛と猛の父を見つけ事情を聞いた。
少し目を放した隙に道路の反対側に公平を見つけた
猛が公平めがけて走り出したのだ。
そしたら、車が来てひかれそうなところに
公平が飛び込んできて猛は助かったのだ。
救急車が来た。

「公平！起きてよ公平！」

「落ち着いてください」

取り乱す佐里を押さえる風太
救急車に担ぎこまれた公平。
佐里と風太は同乗した。

「公平・・・」

すぐに近くの病院に到着して手術が始まった。
人伝いで情報を聞いた真由も駆けつける。

「理沙にも伝えようと思ったんだけどいなくてさ」

「そうなんだ」

「あの人は？」

「佐里さんだよ」

「あの人」

「すごい取り乱してて」

「そりゃそうだわ」

佐里の横に腰を下ろした真由

「落ち着いた」

「うん」

真由は違和感を感じた。

佐里が今初めてあったばかりの他人には
思えなかったのだ。

「公平・・・」

そう思い出すと、声までどこかで

聞いたことがあるような気がする。

でも、そんなはずはない。

今自分が思っている人とは

髪型がまったく違うし、公平に聞いてた特徴からは
かけはなれている。

そんな疑問がありながらも

真由は佐里をなぐさめる。

しばらくして、手術が終わった。

依然として危険な状態ではあるが

とりあえず一命は取り留めた。

「よかった」

3人ともとりあえず胸をなでおろす。
しかし、まだ意識は戻らない。

遠くから公平を眺める佐里、
その横顔を見て真由の疑問が再び浮き上がった。

「佐里さん、ちょっと」

「はい」

真由は風太をその場に残し
佐里とともに別の場所に行った。
しばらくして2人は戻ってきた。

「何の話してたの」

「別に、じゃあ、あたし戻るわ」

「じゃあ、俺も」

佐里だけを残して2人は帰っていった。
翌日もそのまた翌日もまだ
公平は目を覚まさない。

「今日はもう帰ったら？」

「そうします」

風太は佐里と交代で病院にいた。
今日は仕事のない風太は
夕方から病院にやってきた。
猛一家も来ていたようだ。

その後何日かが過ぎた。

「公平・・・」

公平の手を握る佐里。

そのうちに佐里は眠りについてしまった。

そのとき・・・

公平が目がしだいに開いていく。

「さ・・・りさん・・・？」

その声に気づいた佐里は目を覚ました。

「公平さん」

そういつてしっかりと公平の手を握りなおした。

「よかった、先生呼んできますね」

微笑む公平

連絡を受けた風太がやってきた。

真由は知らせを聞いて微笑んでいたそうだ。

そこからの回復は早かった。

しかし、足へのダメージも大きく

リハビリが必要であった。

「公平さんがよくなってよかった」

「心配かけてすいませんでした」

「いえいえ」

公平は佐里へのあのことをわすれていたわけではない。
しかし、自分が完全に回復するまではよそうと思った。
それからリハビリの日々が始まった。

風太はこの日猛と遊んでいた。
なにやら元夫婦で話し合いをするらしいので
風太が預かっているのだ。

「お兄ちゃんの友達元気になった？」

「おう」

「よかった」

子供なりに心配していた猛。

自分のせいであるということも薄々わかっているようだ。

洋子と猛の父は何の話し合いをしているのだろうか。

風太はそんなこと特段気にしていなかった。

「疲れたな」

「うん」

「飲み物でも飲みに行くか」

そういつて風太は猛を虹のカナタへと
連れて行った。

昼間だったので他に客はいないと見越し
連れて行ったのだ。案の定他の客はいなかった。

「この子か、猛って」

猛とは初対面の真由。

店に來ない人とは関わりがあまりない、
特に子供の知り合いなんてほとんどいない。
猛はオレンジジュースを一気に飲み干した。

「はは、いい飲みっぷりだな」
「ほんと」

そういつて笑う真由と風太
なんで笑ってるのかあまり理解できでないけれど
つられて笑う猛。

風太と真由は公平がいなかったら
この笑顔は失われていたかもしれない。
心の中でそうおもった。

「そろそろ、迎えに来る時間かな」

そういつて風太と猛は帰っていった。

どうやら洋子と猛の父は再び一緒に暮らすという
決断にいたったらしい。

翌日

猛の父は公平の病院へとやってきた。

「伊野さんですか」

「はい、そうですが、どちらさまでしょう」

「私は猛の父の戸田幹夫ートダミキオーです。
後藤さんに聞いてこちらに伺いました。」

「あ、猛の」

「先日は、本当にありがとうございました」
「いえいえ」

「あなたがいなかったらいまごろ猛は・・・」

しばらくの間2人は話していた。

この時はたまたま他にはだれもいなかった。

話を終えると幹夫は最後に深いお辞儀をして帰った。

長かったリハビリのおかげでだいぶ歩けるようになった。

この日は退院の日である。

この日佐里と風太が迎えに来た。

真由は店で待ってるよといっていたらしい。

そうして長かった病院生活が終わった。

そのまま3人は虹のカナタへと向かう。

「ここが虹のカナタですか」

「そうですよ」

「さあ、入ろう」

店に入ると

真由と猛そして洋子に幹夫がクラッカーをならし
退院祝いと書かれた紙がはられているのが見えた。
退院祝いのパーティは夜まで続いた。

「じゃあ、そろそろ帰りますね。

猛も寝ちゃったし。」

「今日はありがとうございました」

「いえいえ、そんな・・・」

「こちらこそ本当にありがとうございました」

こうして

猛一家は帰っていった。

残っている4人はその後もしばらく
楽しんでいた。

さらに遅い時間になり

公平は佐里を送っていくことにした。

佐里はまだ完全に治ったわけではないのにと
遠慮したが公平は送りますと佐里の言葉をはねのけた。
なぜなら公平にはあれを実行しようと思っていたからだ。

「じゃあ行きましょうか」

「はい」

「またな、公平」

「おう」

公平と佐里は店を出て
川沿いの道を歩き出した。
しばらくして

「あの、佐里さん・・・」

「はい、なんでしょう」

「いや・・・理沙」

「えっ・・・」

公平はなぜか佐里のことを理沙とよんだ。
戸惑う佐里

「もう隠さなくていいんだ」

「何を言ってるんですか」

「病院に来てくれてたときに見た寝顔
間違いなく理沙だった。」

「・・・」

病院のベッドの横で眠る佐里の顔が
理沙にしか思えないという公平。
そのころ虹のカナタでは・・・

「公平のやつ今頃告ってるのかもな」

「そうかもね」

「ほんと綺麗だったな、佐里さん

あんな人見たことないよ。」

「ほんとにそうかい？」

「え、どういうこと」

道で立ち止まる2人

公平の言葉に黙る佐里

うつむいたままで公平に言葉を返そうとしない。

公平は佐里からの言葉を待つ。

虹のカナタでは

「えっ、嘘!？」

「そうだよ、気づかなかったのかい？」

「そうか、だから。ってそれ公平は・・・」

「どうだろね」

黙っていた佐里の口が開こうとしている。

公平はただそれを見つめる。

「そっか・・・、気づいてたんだ」

そういうと佐里いや、理沙は長髪のかみをとった。
そしていつもの理沙のショートの髪型になった。

「気づかれてなんて思ってた。」

「あのさ、理沙・・・」

「へへっ、だましててごめんね」

「あのさ、理沙・・・」

「ほんとごめんね、悪気はなかったんだけど」

「理沙！」

公平は話を聞こうとしない理沙を

大声で呼んだ。

理沙は話すのをやめた。

「理沙・・・」

俺が事故にあって倒れてたとき必死に名前呼んでくれたよな。

そのときあれって思ってたんだ。

そしてそれは病院で確信にかわったんだよ。

最初わかったときは驚いたよ。

性格なんてまったく変わっちゃってたし。」

「・・・」

虹のカナタでは

「あの子ね、昔から公平が好きだったんだよ。

でも、あまりに身近にいるから伝えることが

出来なかったんだって。

だから、まったく違う人物になって公平に近づいた。

ホストもやめて欲しくて、ホスト嫌いってことにしてたらしいよ。

だからお金も理沙が渡したの。

あたし病院で気づいたんだよ、だからあんとき本人に確かめた」

「そうだったんだ」

昔から公平のことを思っていた理沙。

その気持ちを伝えることが出来なかった。

公平の言葉を黙って聞く理沙

「理沙、俺が好きなのは佐里さん」

「・・・やっぱそうだね」

公平おとなしい人が好きなんだもんね。

あたしとは真逆・・・。

へへ、ごめんね。偽者で変に期待させちゃったね。」

「理沙・・・」

「ごめんね、あたし帰るわ。じゃあね」

理沙は走って帰ろうとした。

そのとき・・・

待てよといいながら理沙の手をとる公平。

驚く理沙。

「勝手に帰るなよ、まだ話は終わってない」

「でも・・・」

「確かに俺が好きになったのは佐里さんだ。

でも、事故にあったときも入院してるときも

全部してくれたのは理沙だ。

俺の意識が戻らないときいてくれたのは理沙だ。」

「・・・」

「確かに理沙は嘘をついてた。

でも、その行動全てが嘘なわけではない。

そうだろう？」

「・・・」

「理沙・・・好きだ」

「えっ・・・」

公平はついに告白した。
相手は佐里ではない理沙だ。

「・・・私でいいの？」

「ああ、もちろんさ」

「公平・・・」

「理沙」

理沙は公平に抱きついて

ありがとう

その一言を言って

こらえていた涙が溢れ出した。

公平はただただ理沙を抱きしめた。

1週間後

カランカラン

「いらっしやい、おや、理沙じゃない」

「真由」

理沙は今日もいつものテンションである。

「最近どうなの理沙」

「公平ったらバイトばかりなんだよ。

お金のことなら心配しなくていいのになって言ってるのに」

「それは公平としてはだめなんですよ」

「そうみたいなんだよね」

あれから

公平はよりいっそうバイトに励むようになっていた。

理沙の家は金持ちの家なので
そんなこと心配しなくていいといくら理沙が言っても
公平はそれはだめだよ
俺いまは無理かもしれないけど
ちゃんと仕事にも就くからといって聞かないのだ。
それでも公平と理沙は幸せな道を歩いていくのだ。

5年後

カーンカーンカーン

この日は理沙のウエディングドレス姿が見られる日である。
2人が出てきた。

公平と理沙は幸せそうな顔をしていた。

「結婚おめでとう、理沙！」

「ありがとう！それじゃいくよ」

ブーケをなげた理沙

ブーケは真由の下へと落ちてきた。

「さんきゅー、理沙」

「今度は真由さんの番だね」

「うるせーよ、猛！あーあ、昔はもっとかわいかったのにな
こんな中坊になりやがって。」

「ところで、風太兄さんは」

「さあね」

その後

公平と理沙そして真由と猛一家は
虹のカナタで祝いをしていた。

カランカラン

「すいません、今日は貸切で・・・」

「おやおや、お幸せそうで」

「風太！」

「ただいま！」

「おかえり」

3年前風太は急に

ホストの仕事を辞めて旅にでると言い出した。
旅といっても行く先があるわけでもない。

何を思ったのかはわからないがそういった次の日

風太は旅立ったのだ。

それ以来の再会である。

「猛、大きくなったな」

「風太兄さん、久しぶり」

「公平と理沙おめでとう、これ」

そういつて渡したのは大きな袋

なかをあけてみるといろいろなものが入っていた。

どれもがらくたにしか見えないが

風太からの贈り物らしい。

「金全部使っちゃったからまたあの店で働くことになったんだ」

「またかよ」

「いいじゃん、俺公平と違って人気だし」

「それをいうなよ・・・」

みんなが笑う

それぞれがそれぞれの形で幸せになる。

今日もここ虹のカナタは笑顔があふれるのだった。

1-3 (後書き)

更新遅れましたが
読んでいただいております。

2-1 (前書き)

Episode 2の主人公は

虹のカナタ Episode 1で少し登場した
隅五郎とその友人です。

それではどうぞ！

2—1

今日も晴れ渡るこの団地。

少し離れた場所にあるのは

MONEY LIFE

金貸しである。

オーナーは隅五郎である。

彼は期限までに返済をしなければ

とんでもないことになるという

噂が流れている。

そんな噂の流れる隅のところには

今日も客はやってくるのであった。

「では、1ヶ月後に20万

きっちりお返しいただきますよ。」

「はい」

そういつて客の男は出て行った。

そのとき電話がかかってきた。

「どうも、MONEY LIFEです・・・

なんだ、あなたですか。」

「五郎ちゃん、どうしよう」

「今度はなんなんですか」

「今日道歩いてたらさ、石けとばしちやって

誰かに当たったんだよ。

もし、あれが怖い人だったら仕返しにくるかも・・・

どうしよ、五郎ちゃん!!」

「はあ、またそんなことですか、そんなことでいちいちきませんよ。もういいですか、きりますよ。」

「ちよつとまっ」

ガチャン隅は電話を切った。

電話の相手は昔からの知り合いの神野勉ージンノツトムーであった。

彼は極度の心配性である。

ちよつとしたことでやたらと不安になるのだ。

普通の人ではなんでもないことであつたとしても彼にとっては重大な出来事なのだ。

ことあるごとに電話がかかってきたり

いきなり飛び込んできたりするのである。

隅は昔から勉を見ているので

扱いもだいぶ慣れていた。

しばらくして店のドアが勢いよく開いた。

「ちよつと五郎ちゃん！なんで電話切つたのさ

もう、なんかあつたのかと思つたよ」

「別に何にもありませんよ、切ると言つたでしょう」

「そうだけど・・・」

そのあとも勉は不安をぶちまけるだけぶちまけて帰っていった。

「ちえ、五郎ちゃん最近なんか冷たいや。」

そんな愚痴をこぼしながら

団地へともどる勉。

勉も団地っ子である。

そのまま歩き続けていると

何かにぶつかって倒れた。

「おう、すまのかばんおおきいて見えへんかったわ。大丈夫か」

「あ、はい」

「うちな、この団地に越してきたんや。」

仙波千恵「ちゅーねん、よろしくな！」

声の大きな同い年ぐらいの千恵に

勉はなにも言えずにただ聞いているだけであった。

そのまま千恵はどこかへと向かっていった。

勉も帰っていった。

その次の日

「だーから、そんなはよう返されへんねんって」

「そういわれましてもねえ、そんな長い期間

返済を待つわけにはいかないんですよ」

「なんでや、ええやんけ

返さん言うてるわけやないねんから」

「はあ」

そのとき電話が鳴る。

「五郎ちゃん、五郎ちゃん！」

「なんですか、今忙しいんですよ

声のでかい方がいらしてて」

それを聞いてその客は

「だが、声がでかいって。

まだ話終わっとらんやろが

はよ、こっちもどってこんかいな」

隅はあきれがおをしながら

「はあ、そういうわけなんですよ。それでは」

「あつ、ちよつとまっ」

ガチャン

隅は電話を切った。

「とりあえず今日のところは

お引取りください」

「しゃーないな」

そういつて千恵はMONEY LIFEを出た。
すると外には勉強がいた。

「どうして、ここに」

「ああ、実はな」

千恵は団地に越してきたのには理由があった。

千恵は母とおじとともに住んでいた。

ある日、そのおじが多額の借金を残して

いなくなってしまったのである。

母はなんとか借金を返そうとした。

毎日来る取立てにも耐えていた。

しかし母は交通事故で死んでしまったのだ。

千恵は借金取りから逃れるために団地にやってきた。

千恵は母との思い出の詰まったあの家で

再び暮らしたかった。

だから借金を返済するのに金が必要なのであったが
そんな金は持ち合わせているはずもなく。

借りてもいつ返せるかわからない、

そんな人には金は貸せないといわれ食い下がっていたのだ。

「そうだったんだ」

2人は虹のカナタに来ていた。

「せやねん。はぁうちはどないすればええねん。」

「僕が頼んでみようか」

「ほんまに？」

「僕五郎ちゃんの友達だし」

そんな会話を真由はグラスを磨きながら聞いていた。

カランカラン

「いらっしゃい」

「ビール1つ」

「あいよ」

店に入ってきた女性は勉たちの
3つ左の席にすわった。

勉はその女性に見覚えがあった。

女性は勉のほうをみた。

「あれ、つとむちゃんじゃない」

「やあ、悠里ーユウリー」

彼女は渡辺悠里。
勉の元カノである。

「その人は？新しい彼女？」

「ちがうよ」

「うち、そんなんちゃうで。昨日会ったばかりかな」
「そう」

「んな、まあよろしく頼むわ」

そういつて千恵は店を後にした。

勉は悠里と一言、二言交わしたただけで
店を出た。

翌日、勉はMONEY LIFEへとやってきた。
中に入ると隅はソファにどかと座っていた。

千恵のことを話した勉。

隅はなにも答えない。

しばらくして口を開いた隅

「いくらあなたの頼みでもそれは無理ですよ。」

と言われると思っていた勉。

「いいでしょう」

「だよね・・・、えっ？」

驚いた表情をした。

「ただし、今後私に関与しないでいただきたい。」

「えっ・・・、どういうこと」

「もうあなたにはうんざりなんですよ。」

「そんな・・・」

「毎回毎回どうでもいいことで

あーだ、こーだと聞かされる身にもなってくださいよ」

勉はMONEY LIFEを飛び出した。

そのままあてもなく走り続けた。

疲れて歩いて団地のほうに歩いていった。

すると前から千恵がやってきた。

「どうやった？」

しばらく間を空けた後

勉は起きたことを千恵に話した。

「そないなこと・・・」

「五郎ちゃん・・・」

「なんであいつなん？」

自分とあいつってなんか全然かわりなさそうなのに」
「それはさ」

小学校のころ

心配性のせいでうざがられて

いじめられていた勉。

そんな勉に手を差し伸べたのは隅であった。

そのころの彼に今のような面影はなかった。

彼は勉の心配をすべて聞いてしんしに対応してくれた。

そんな隅に徐々に心を開いていった。

しだいに打ち解けた2人はとても仲がよくなった。

しかし高校になったころ突如彼は

今のような性格になってしまったのである。

金のことになると異常に執着する。

それが原因で同級生を思い切り殴り飛ばし

高校は退学となった。

それから数年後今のMONEY LIFEをつくったのだ。

「そうやねんや」

「うん、なんで変わっちゃったんだろうな・・・」

「ええよ」

「えっ」

「もう頼まんでええ、友達なんやろ、大事にせな」

「でも」

「ええって、うち頑張って金貯めるわ。」

仕事もいま見つけてきたしな、結構時給ええねんで」

そう明るく話す千恵に対して

勉は何も言わなかった。

いや、いえなかった。

勉と別れた千恵は

MONEY LIFEへと向かった。

「隅、おるか」

「なんですか」

「お前なんであんなこと言うたんや」

「別に、思ったことを言っただけです。」

「あいつの気持ち考えたれや、

あいつにとってお前は大切な存在なんや。

うちに金貸さんでええ、せやけであいつには謝れ」

「知りませんよ、ご用件はそれだけですか。」

それではお引き取りください。

だいたいあなたになにがわかるんですか」

「うちにだってわかるわ。」

金は大事や・・・大事なんや・・・

せやけど友達も大事やろ・・・」

「・・・」

「・・・金の亡者や、あんたは金の亡者なんや」

この言葉をきいた隅は

「早く帰れ!!」

ものすごく声で千恵をどなりつけて
店の外へと追い出した。

「俺だって・・・」

そのころ

勉は虹のカナタのカウンター席に腰掛けていた。
そこに現れたのは悠里だった。

「何かあった？」

勉は悠里にも全てを話した。

「そうなの。ねえ、なんで彼がああなったか知ってる？」

「えっ」

「知らないのね、いいわ、教えてあげる」

隅の父親はで酒をのみ
あちこちでギャンブルに手を出して

借金まみれになっていった。
もちろん返せるわけがない。

取り立てもくる頻度が多くなっていた。
母はそんな父に愛想をつかして妹だけを連れて
出て行ってしまったのだ。

運悪く隅自身は交通事故にあい
入院していたために連れて行ってもらえなかった。

後になって探しても母と妹はどこにいるのかわからなかった。
高校生になったある日、五郎はドアを開けた。
すると、男たちが押し入ってきた。

五郎は突き飛ばされ頭を打ち気絶した。
目を覚ますと父親はいなかった。

金目のものもなにもかもなくなっていた。
父親の行方はわからなかった。

あんな父親でも隅にとっては大事な人だった。
それからしばらくしたところに、父親の死体が見つかった。
このとき五郎は決意する。

金を手に入れてやる。誰よりも多く。
そうして隅五郎は

MONEY LIFEを作ったのであった。

「知らなかったよ、そんなこと」

「彼には、お金に対して異常なまでの執着心があるのよ。」

それから勉は一言も話さなかった。

悠里はただ黙って彼の横に座っていた。

翌日

勉は虹のカナタで千恵に

昨日悠里から聞いた話をした。

「そうやったんや」

「僕はいつたいどうしたらいいんだ・・・」

「はい、ビール」

目の前に置かれたビールを見て

注文してないと真由に言う

真由はいいよ、サービスだからといった。

ありがとうと勉は言った。

「五郎ちゃん、変な噂流れてるけどさ、

別に怖いことするわけじゃないんだよ。

ただ店につれて行って、お金を貸した人と話をするんだよ。

その人の相談にのったりして。

本当はやさしいんだよ、五郎ちゃんは」

「そうだったんだ」

カウンターの向こうで真由がボソツと言った。

しばらく話した後千恵は店を出た。

そのころ

MONEY LIFEでは、

「期限は今日なんですが」

「すみません・・・」

「返せないということですか」

金を借りた男性が返せないということ

MONEY LIFEへと連れてこられていた。

男性に詰め寄る隅に男性はおびえていた。

男性は噂どおりなのだと思った。

「で、いつごろなら返せそうなんですか」

「えっ」

男性は拍子抜けした声で言った。

「待っていただけるんですか」

「しかたないでしょう、返せないのなら」

「ありがとうございます、できる限り早くお返しします」

「お願いしますよ、それからこのことは誰にも

言わないでいただきたい。そうでないと

踏み倒すやからが出ないとも限りませんからね。」

「わかりました、本当にありがとうございます」

虹のカナタでは
カランカラン

「いらっしゃい」

「真由、いつものお願いね」

「了解」

真由に話しかけたのは

団地に住む原田桜一ハラダサクラ一であった。

「さっきねそこで声の大きい人が

怖そうな人たちに絡まれてたの。」

「えっ」

まだ店にいた勉はそれを聴くやいなや
店を飛び出していった。

2-1 (後書き)

次話もよろしくお願いします！

2-2 (前書き)

千恵の下へと急ぐ勉！

千恵が絡まれていたという
場所へと急ぐ勉。

極度の心配性は千恵に関することに働いた。
自分に関すること以外でこれが
働くのは初めてのことであった。
少し行ったところで千恵が座っていた。

「大丈夫？」

「ああ、でも財布の中身持ってたかどうかわからない」

「そんな」

「しゃーない、いずれはばれるのはわかつたし」

「・・・足」

「ああ、ちょっとこけてもうてな」

それを見て勉は自分の背中に
乗るように千恵に促した。

千恵は遠慮したが勉は無理やり千恵をおぶった。
そのまま千恵の家に向かった。

「うちはD棟の501や」

「わかった」

「下まででええで」

「いいよ」

D棟にエレベーターはない
そのため勉は階段5階ぶん千恵を

背負ってのぼったのだ。

「ありがとうな」

「いいよ、別に」

「ちよつとよって休憩していき」

「そうさせてもらおうかな」

勉は千恵の家に入れてもらった。
家の中に物はほとんどなく
必要最低限のものだけがあった。

「茶でええ？」

「うん」

千恵は台所でお茶を入れ始めた。
勉は台の上にくつか写真があるのをみた。
母親と思われる人物と写っているものが多い。
そのなかに一枚とりわけ幼い千恵が写った一枚があった。
写真に写っているのは4人だった。
母親と思われる人と千恵
そして他の写真にはいない男性と男の子が写っていた。
千恵がお茶をもってきた。

「これは・・・？」

「ああ、それかそれはな

うちの父ちゃんと兄貴やって。

うちはまったく覚えとらへんけど。

母ちゃんがこの写真だけずっとかざっとったんや。」
「へえ」

勉は写真に写る少年を
見たことがあるような気がした。

お茶を飲み終えて勉は
家へと帰っていった。

あの日以来

勉は隅のところへはいつていない。
もちろん電話もなにもしていない。

千恵はせっせとお金をためるために
働いている。

でも、そのペースでは何年かかるか・・・
そんなことを本人もわかつてはいた。

それでも千恵はせっせとためているのだ。

ある日

虹のカナタで

「ねえ、お兄さんの場所のあてとかほんとにないの」

「ああ、ないわ、たぶんな」

「そうなんだ」

「・・・いや、あるかもしれへん」

「え!？」

「一回だけ母さん宛に手紙が来とったわ」

「その手紙は？」

「わからへん、探してみる」

「行ってもいい？」

「ああ、ええで」

2人は千恵の部屋へと急いだ。

千恵は母親に関するものを残したダンボールを押入れから引き出して手紙を探し始めた。勉もそれを手伝った。

1時間後

「これや、これこれ」

「あった!？」

—仙波智子様へ—

お久しぶりです

お元気ですか。

ようやく住所がわかったので手紙を書きました。

千恵も元気ですか。

僕はあれからいろいろありましたが元気にやっています。

ご存知かもしれませんが

父は亡くなりました。

でも、1人でちゃんと暮らしています。

いつかお会いできればいいですね。

それでは

「Gって・・・」

「わからへんわ」

「住所は？」

「んっとなあ。おお、近いでこくらへんや」

「ほんと！？ねえ、いつてみない？」

「えっ？行くってこいつんどこにか？」

「そうだよ」

「行ってどうなんねん、だいたいうちのことなんか・・・」

「そんなのわからないじゃないか。行ってみよう」

「・・・」

「ねえ」

「わかったわ。行ってみよ」

2人は手紙の住所のところへと歩いていった。

差出人はGとしか書かれていなかった。

そこにまだその人物がいるとは限らない。

しばらくして2人は住所の場所についた。

「えっ、ここ・・・」

「ここって・・・」

2人がたどり着いたのは

「どうかしたんですか」

後ろから声をかけられた

「ご、五郎ちゃん・・・」

「また金借りに来たんですがその方のために」

「Gってもしかして」

「なんの話をしてるんですかお二人さん」

「お、お兄・・・ちゃん？」

「はい？何を言ってるんです・・・か？」

「あんたが、うちのお兄ちゃん・・・」

「え・・・？どういことですか」

とまどう3人

3人とも膠着したままである。

「五郎ちゃん、お母さんの名前って・・・」

「・・・智子ですが」

「ほんまに、ほんまにあんたが・・・」

「もしかして、あなたは・・・千恵・・・？」

「せや、うちは千恵や仙波千恵や」

「・・・そんなまさか、あなたが・・・」

衝撃の再会に戸惑う。

勉はとりあえず手紙の住所であった

MONEY LIFEへと入るようにいった。

そとは肌寒かった。

五郎と千恵は落ち着きを取り戻した。

「ほんまにお兄ちゃんやねんな」

「そうです、私の母は仙波智子、あなたの母」

「びっくりやわ」

「それはお互い様ですよ、あなた・・・いや

千恵は正真正銘僕の妹です。」

「お兄ちゃん」

そこに金貸し隅五郎の姿はない。

千恵の兄・五郎がそこにはいるのだ。

千恵と五郎はお互いに別れてからのことを話し合った。

五郎は千恵と母の暮らした家を

取り戻してくれることになり

そこで千恵をくらすことになった。

隅はMONEY LIFEを閉めた。

衝撃の再会から1週間後

千恵と五郎が引っ越すことになったこの日

虹のカナタでは3人でお別れ会が開かれていた。

「乾杯!!」

「いや、ほんとによかった」

「ありがとうな、あんたがおらへんかったら

こうはならなかったわ、ほんまありがとう」

「いや、僕は別に」

「いやあなた・・・勉のおかげです。

ほんとうにありがとう」

「五郎ちゃん・・・」

そんな会話をカウンターのなかで

真由は聞いていた。

「はいよ、これはサービス」

食べ物のプレートが3人の前に出された。

「ありがとう」

こうして今日も虹のカナタでは笑顔が絶えないのであった。

2-2 (後書き)

今回の更新だいぶ遅くなりました・・・

次もこのぐらいあくと思います。

それでもよければ

ぜひ読んでください^^

よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2697p/>

虹のカナタ

2011年10月7日14時28分発行